

日本産漆を支援する

NPO法人

壺木呂の会

I C H I K I R O

— 漆掻き懇談会(漆掻きサミット)特集 —

会報
第19号 / 2019年11月発行



3	— 「次世代を担う若い漆掻きさんの懇談会」前編	理事長	本間 幸夫
22	— 第19回クロメ会報告	正会員	清水 由美
23	— うるし言の葉4「漆掻き作業（茨城県奥久慈地方）」	賛助会員	吉川 由季子

[表紙]



漆掻き作業
ウルシの木から漆液を採取する作業。6月上旬より始まる。漆掻き作業がしやすいように周囲の草刈りから始まり、目立て、初辺、盛辺、遅辺、裏目掻きと10月上旬まで続く。

「次世代を担う若い漆掻きさんの懇談会」前編

理事長 本間 幸夫



杵木呂の会はもとも漆掻きさんの支援を目的に結成されました。

昨今のウルシ木の激減と漆掻きさんの支援のため、4月20日と21日の両日、日本中の若い漆掻きさんに声をかけ集まっていたいただき、植栽と漆掻きさんの抱える問題についてお話を拝聴しました。皆様からは現在直面している問題について、率直な意見を伺うことができ大変有意義な2日間でした。

これから植栽を進めたいという方々や行政をはじめ多くの関心のある方が参加してくださいました。

今回の懇談会で活動地域がかなり離れていても、多くの漆掻きさんの話の中に幾つか共通の大きな問題が存在していました。

今号では初日の20日の分だけを取り纏めました。2日目の21日の分は次号に掲載予定です。

なお参加された漆掻き会員の皆様には漆掻き道具と分根法の2冊の本とDVD及び、漆掻き鎌を贈呈し活用していただくことになりました。



会場風景

本間理事長：

本日はお集まりいただきまして本当にありがとうございます。
 杵木呂の会を代表してお礼を申し上げます。

出席者の紹介

漆掻き会員

- 岩手県二戸市：… 小村剛史氏
- 福島県郡山市：… 平井岳氏
- 茨城県常陸大宮市 本間健司氏
- 長野県駒ヶ根市：… 竹内義浩氏
- 京都府福知山市：… 山内耕祐氏
- 徳島県三次市：… 松永猛氏
- 新潟県村上市：… 遠山友巖氏
- 茨城県常陸大宮市 富永司氏
- 神奈川県小田原市 原田陽輔氏
- 三重県熊野市：… 瀬古正幸氏
- 香川県善通寺市：… 松本和明氏

- 国立研究開発法人森林整備機構
- 静岡県静岡市 中山間部振興課 …… 田端雅道氏
- 町文化研究所代表 …… 多々良典秀氏
- 金沢大学国際文化資源学研究センター …… 森田みか氏
- 石川県輪島市役所 産業部漆器商工課 …… 神谷嘉美氏
- 福島県会津若松市 漆とロック株式会社代表 …… 細川英邦氏
- 京都府 株式会社堤浅吉漆店 …… 貝沼航氏
- monomo株式会社工芸文化コーディネーター 堤卓也氏
- 秋田県川連漆器で修業中 …… 松山幸子氏
- 埼玉県蓮田市で漆劇場主宰 …… 店網華子氏
- 神奈川県小田原市農政課・林業振興課 …… 加藤那美子氏
- 明治大学ハイテクリサーチセンター宮腰研究室 …… 新倉和宏氏
- 神奈川県鎌倉市 鎌倉彫協同組合 …… (林野庁から出向)
- 坂本豊氏
- 高山純一氏

本間理事長：

この方々が漆掻きさんと杵木呂の会以外でご参加頂いております。幅広い方々に今日、明日にかけてご意見を伺いたいと思っております。

三好かがり副理事長挨拶：

当会の活動について

杵木呂の会は20数年前に数名の作家で始めた草の根運動です。日本産の漆と漆掻きさんが消えてしまうのではと懸念して、一人一キロずつ漆を買って支えようというところから始まりました。これが当会の名前の由来です。

漆掻きさんには必ず採取データを付けてもらいます。いつでもどんな天候でどういうふう採ったかなどです。漆掻きさんも真剣に取り組んでいただけではないかと思えますし、わたし共もいろいろデータがあつて、ありがたく思っております。

漆の発送にはいろいろやってみて現在はスパウトを使っています。キャップ付きで透明で漆の沈殿も分かりますし、使う時のもんで使えるのでとても便利です。

会員は漆を荒味で受け取り自分でクロメ作業をしています。年に一度クロメの研究会をしており、始めた頃は素黒目だけでしたが今は蝨色や

梨地も作っています。

漆掻きさんからの漆の購入を何年も続けました。が状況は改善せず、なおかつウルシの木が無くなるのではないかと懸念もあつて植栽も始めました。漆掻きさんが掻きやすい土地、良く育ちそうな土地を選び間隔を広めに取って植えました。現在では立派な見本林に育つてそろそろ掻ける木もあります。

苗は神長さんが研究され栽培しておられるものを使わせていただいております。全国の色んなプロジェクトに苗を寄付したり、植栽のお手伝いもしています。わたし達が協力したところが成果を上げていかれるのは嬉しい事です。

杵木呂の会の活動や日本産漆を少しでも皆様に知っていただくとうと会員展も行っています。新宿の伊勢丹、常陸太田市の梅津会館、北鎌倉の東慶寺などで開催し、会員相互の親睦を図ったり色々な講演やワークショップを行いました。広く杵木呂の会とはどんな活動をしているのかをお知らせしています。

ウルシは植栽後の管理がとても大変で費用が掛かります。国からお金が出ているわけではないわたくし達草の根運動ではウルシの木のオーナー制度を始めました。賛助会員や一般の方にウルシの木一本



三好副理事

3万円でオーナーになつていただいて、その木から採れた漆で記念品を作つて差し上げる、半ば寄付みたいなものですが、とても多くの方が賛同して下さつて見本林はきれいに育っております。オーナーの方々には感謝の気持ちでいっぱいです。
 会の活動が日本全国の漆の復興に少しでもつながつて来たと思えますと理事長始め会のスタッフも心から嬉しく思っております。会の活動も変わりながら広がつてまいりました。今回この会を催してまた新しい展開が広がるのではないかと期待しております。

本間理事長：

奥久慈地方では漆苗を分根と言う方法で作っています。苗作りには種による方法と分根があります。種は大量の苗を一度に作るのに向いています。分根はなかなか爆発的に増やせませんが、良い木だけを選んで分根して行けばかなり量が採れる良い木ができるということがあります。奥久慈漆生産組合長の神長正則さんと田端先生のご尽力で現在では2倍以上採れる木が特定されて苗を作っています。皆様の地元にも元々在る木の、その性質を受け継ぐクローンを作る技術です。文化は地域に根差していることですから、その地域で在る木を増やして行くのも一つの方法だと思っています。

皆様のお手元に届いていると思いますが、分根法の本をこの一年ほどかけて作りました。

漆掻き道具製作過程のDVDも作りました。全国で漆掻き鎌の作り手が少ない現状で、2年半くらい前に、浄法寺の漆振興室、今の産業課から鍛冶屋がいなかったと打診がありまして、わたしが良く使う東京の鍛冶屋、小信製作所を紹介しました。担当の工藤さんやいろんな方が来られ様々打合せをして制作を始めて少しは良いところまでは来ていたのですが、小信製作所の斎藤さんの後継者が止めてしまわれて、後継者が居ないところではやっても意味がないと浄法寺では手を引かれてしまいました。ただ我々はせつかくここまで来たのだから、データとしてきちんと残せないとどうかと動き始めたところ、医療器具会社テルモの芸術文化支援金をいただけて活動を進めることができました。



3Dデータとつてありますので3Dプリンターで本物と同じような形に作り出すことができます。

どこの地域でも鍛冶屋さんには鎌を作ってもらいたい時にDVDとテキストがあれば、決してベストとは言いませんが、ある程度のもので作れます。検証は長野の竹内さんとうちの本間健司が行いました。わずかな刃のカーブの違いで削った時に鉋屑が詰まり作業効率が悪くなる事がありました。そういう事を竹内さんにご指摘いただき、鍛冶屋さんまで木を持って行き、実際に削ってちゃんと分かるようなやり方で説明していただきました。完璧なものというの中々難しいのですが、我々はそれを目指して今後少しずつ続けていきたいと思っています。

吉木呂の会は漆掻きさんの支援が目的で発足した会です。どうしたら漆掻きさんの役に立てるのかとの観点から植栽を進めて来ましたが、失敗やいろんなことがありました。第五見本林ではほぼ全滅に近い被害がありました。土地が元は重機を保管していた場所で、地面がカチカチでうまく育ちませんでした。他にも湧き水があつたり等いろいろな弊害を経験して、その中で勉強しながら少しずつ畑を作つて来ました。

今では福島県や漆関係の方々が見学に来て下さつたり、多くの方に参考にしていただいているのではと思っております。

わたし達は会員、賛助会員や多くの方のご寄付などで活動しております。自治体などからの支援ももらっております。ほとんど自前で活動をしています。

本間理事長：

田端先生からいろいろお話いただきましたが、地域で孤立しやっている方もおられるし、問題点が地域として異なることがあると思います。皆さんのお考えを色々話していただいて情報の共有が図られれば良いかとこの会を企画したわけです。漆掻きさんにお話をいただきます。

岩手県二戸市 小村剛史氏：

漆掻きを始めて今年で11年目になります。最初の5年間は漆が売れなくて余るから採るなと言われ結構大変な思いをしていました。5年ほど前から文化財の修復で使っていただけのようにいつか生活ができるようになりまし。すごくありがたいことだと感じています。

需要があるのは素晴らしい事ですが、反面様々な問題が出て来ます。漆掻きが使える木に限りがあります。現在文化財の修復に合うように職人を増やし、苗作りもやっているので、掻けるウルシの木が、山の手入れや苗作り、植林と、そのスピードに間に合わないのではないかなと感じる部分もあります。

今年掻くウルシの木を買いに地主さんのところへ行きました。木にひもを巻いて掻かせてもらいますという印にするのですが、途中にある木も、道端にポツポツあるような木にもひもが巻かれて、数年前には考えられなかった様な木も買われていました。やはり大分木が少なくなつて来ている印象を受けました。

次に田端先生よりこの会の趣旨を違った方向からお話していただきたいと思っています。

森林総合研究所 田端先生：

本間さんが2倍と言われましたが実は5倍ぐらい量が違うものも特定しています。もしかしたらもつと違うものもあるかと思っています。ただ我々としては特定のものを作るだけではなく良いものを作る、量だけではなく質が最終目標ですのでそれも含めて活動しているところです。

現在、地域の漆掻きの情報共有が中々思うように進んでいません。また漆掻きの職人だけでやっているわけではなく地域の支え、地域の中でどんな取り組みをしてどんな展開をすれば良いかが非常に大事になると思っております。

その背景は国産漆の不足の問題、大もとは4年前、2015年の文化財の修復漆の国産化が大きな流れです。現在日本産漆は1tちよつと、今年は1・4tですが、文化財に使うのは2・2t、それ以外に使うのがあるので1tぐらい足りない状況です。先ほどの問題点の中で地域の資源はここに参加されている漆掻きの方々はある程度把握はされていると思いますが、全部は把握しきれていない状況があります。我々の目的は各産地の現在の実態と課題をここに居る人たちと情報共有をすることです。それを踏まえて国産漆増産、あるいはその地の地域再生を考える、地域再生、地方創生と言われていますがそれをもう少し地に着いたものにしたいです。

良い漆と言うのは判断が難しいところですが、去年の品評会で感じたことがあります。品評会の時にわたしが漆樽の蓋紙を開けて行く係りで、瀬古さんと浄法寺で名人と言われている工藤さんの盛り辺の樽の蓋紙を開けた時、開けた瞬間、空気に触れた瞬間にさつと色が付きました。それは何かは分からないのですが、空気に触れた瞬間に反応できる酵素が生きている漆があるのかと思いましたが、それを確かめたいし、そんな漆を採れるようにいろいろ勉強もして行きたいと考えています。



岩手県小村氏



新潟県遠山氏

本間理事長：

現在茨城県北の奥久慈地方では2・2tの漆を採る木を植えるのに十分な空き畑があります。ところが空き畑があるのは管理ができないから空き畑なのです。代々守つて来た畑の管理ができないのが現状です。難しい問題が絡んで来ますが、そこら辺を手厚くするのはどうすれば良いのかということですね。管理費を上げて行くだけではだめです。そのためには明日資料を見ていただきながら皆様と意見を交換できればと思っております。

新潟県村上市 遠山友蔵氏：

浄法寺で15年程前に漆掻きの修業をしました。村上には昔からの漆の産地で、江戸時代には浄法寺よりも上の産地で北前船で輪島へ輸出するほどの規模でしたが、今はもう継ぐ人が居なくて色々難しいところがあります。昔からの流れのおかげでウルシ植栽について反対はほぼありません。

現在住んで居る猿沢、この漆は昔から有名だと聞いています。植栽に関しては全くと言って良いほど反対はなく、逆に協力的な方たちが多いです。今は猿の害で放置されている畑が多いので草刈りするなら勝手に植えて良いと言われて植えています。

村上に関しては地元の反対などの弊害は無いです。植栽はひとりでする範囲では進んでいると思います。

本間理事長：

猿沢ではその年に採れた漆の良し悪しを樽を叩く音で判断すると読んだことがあります。どうなのでしょうか？

遠山氏：

多分量を増すために油を混ぜていたのだと聞いたことがあります。わたしはそう感じていません。やつぱり地域、地域の特性なのでしょうが、ごまかそうところがあるがやつぱり強いし、そうだと思います。去年の漆が余っているから混ぜました、油を混ぜましたというのは村上、新潟でなくともどの地域でもやっていたのではないのでしょうか。

本間理事長：

和紙に漆を数滴たらして下からロウソクの炎であぶると油がバアッと染みる、そんな検査をするというお話を聞いて、自分でもやったこともあり漆を油臭い漆を買った事があった、和紙に少しだけ漆を垂らし下からあぶったら本当にボワッと、普通漆では考えられないぐらい漆の周囲にガツと広がりました。そんな経験があります。

(懇談会の数日後、遠山さんから養生掻きしてみたことのお話があり、それに合うカンナを会より提供させていただきました。後日その結果などを報告できると思います。)

福島県郡山市 平井岳氏：

僕は杓木呂の会の本間先生の元で5年間ほど修業させてもらいました。その時に奥久慈地域で漆を掻いていましたが、現在漆掻きは3年ほどお休みしています。今住んでいる郡山周辺、福島県の中通り地域でウルシの木を探してみましたが見つけれませんでした。

本年度二戸で日本漆掻き技術保存会の長期研修に参加する事になり、今日おいでになっている瀬古さんの元で勉強する予定になっています。長期研修は浄法寺で半年間漆掻きに必要技術を勉強する研修です。短期研修もありまして昨年受けた時は3日間プロの漆掻きさんの元で修業させてもらいました。次の年、漆掻きの長期研修を受けるかどうかを検討する研修になっています。

福島県内の漆の生産量は昨年度が24kgだったそうです。掻いている方も現在3人しかいらっしゃいません。生産量は少しずつ増加しているようですが依然少ない状況です。

ウルシの木の資源の減少はかなり大きな問題です。去年、一昨年と県内を探して回りました。元々福島は会津が漆器の一大産地でそれに付随してウルシの木もあつたようですが、やはり先ほどからの話の様に管理がされていなくて、他の木に負けて漆を採れる木は無い状態でした。植栽活動をしている団体や自治体もありますが、基本的には植栽を始めても追いついていないと各方面から聞いています。

今は奥久慈地域の感覚からするとやはり育てる方が一番苦労されていると思います。行政の支援があると良いのですが、茨城に居た頃何度か林野庁の方とお話しましたが、やはり中々そこにお金を出すのは難しい、動いてはいますがとの返答はいただきました。現実としてはあまり見えてきていないところがあります。

田端先生：

平井さんのお話を少し補足させてもらいます。会津が中心でしたが喜多方にもウルシの木はあります。掻ける木ではなくて植えた木、ほとんどまだ若い木ですが多分8000本位はあると思います。実際に掻けるかどうかまだ分からない、衰弱して枯れているのが結構多いです。病気が問題になっていることもあります。

苗木も元々お父様が作っていた方がいて、また作ろうと奥久慈に見学に来て勉強しています。分根や実生もやって下さいとお願いしてやっています。福島県を中心にしながら各市と連携してやっていますので、ぜひ平井さんには掻き手の中心になっていただきたいのです。



福島県平井氏



本間理事長：
ひとりの漆掻きさんが生活するために必要な本数は、1シーズンに400本から500本掻いて、10年から15年がサイクルなので、4000本から5000本だと考えています。これには植栽がまず進まないことには漆資源としては難しい事だと思っています。

田端先生：

植栽への補助は100本では受けられる事にはなっていない。少なくとも1000本から2000本、県によって違いがありますが、それぐらいないと林野庁の補助金は受けられません。補助金と別の助成があるのであればそれをうまく活用していただくのが良いかもしれません。

もうひとつは植えるところの問題です。いずれにしてもトータルとして考えて行かないと単に苗があるから良いではないのです。育てるには非常にコストも手間も掛かるし植える場所によっては全部駄目なところもあります。だから耕作放棄地すべてが良いわけでは無いのでちゃんと良いところに植えようと話をしています。

重要なのはまず掻ける木があつてこそスタートなので、どう育てて行くか、そこをどうクリアして目標に向かって行くかだと思います。個人で補助を受けてやるのはハードルが高いですから、今までの漆の生産者の方に植えてもらう、また団体が植えるにあつては最低の本数があるので、そこを理解すると補助は得られます

行政の方に補足してもらうことがあればと思いますが、どうですか？

静岡市 多々良典秀氏：

まだ勉強を始めたばかりなのですが…。静岡市ではこれから林業家の皆さんとウルシを育ようとしています。静岡は意外に総漆塗りの社殿群がたくさんあつて京都と同じ数です。静岡浅間神社、久能山東照宮など国の重要文化財、国宝文化財が全部で39棟あります。それを地産地消で守るしくみを作ることになり、本年度から漆の事業を林業家の皆さん、文化財の所有者、伝統工芸を継承している方々と一緒にやって行くという事です。まだまだ勉強の最中で今日も参加させていただきました。詳しい制度の事については分からないので申し訳ないです。

茨城県常陸大宮市 富永司氏：

奥久慈工房のスタッフとして2002年からお世話になっていきます。その年から5、6年、20本、30本、自分達の植えた林の漆を掻いていました。工房のスタッフが自分でウルシを植え、畑を管理し、漆を採り、木地も作り、塗って仕上げる一貫生産に憧れたというところがありました。

最初の頃は全く分からなかったので新潟の漆掻き、渡辺勲太郎さんに掻き方を教わりに行きました。「4日に一遍、朝早く行って掻きなさい。

米粒1つ分ずつ上にあげる、カンナの筋1本分上にあげて傷付けて行くんだよ」とそれだけを教わって、4日に一遍20本、30本を普通の業務もやりながら朝早く起きてやっていました。どんなに頑張っても25辺回るのが精いっぱい、量が採れずへうで何回も何回もひたすらに採って、少しにじんでいる漆もこすり採って、耳かきですくう様に採っていました。今思えば全然出ない状態に木を作っている、木を壊している掻き方をしていました。

それを変えてくれたのが少し前に亡くなった谷口吏さんです。谷口さんに茨城に来てもらって自分の現場を見てもらいました。「ああ、やつぱりこんなじゃなあ、一回おれが一日見せるから、君はとにかく鎌すりだけしてついてこい、君が付けた傷の上を自分が付けるから」と自分が前回まで付けた傷の上を掻いてくれました。自分が採っていた量の1・5、6倍、40本くらい回って5、600gしか出なかったところで800までは行かないけど結構な量をいきなり採ってくれたのです。「おれが付けた傷はこうなっている、君の溝が形ばつかりで角度が全然整っていない、上にいつたり下になったり、ぼくの傷をちゃんと見てやりなさい」と言われました。要するに丁寧なやり方、事でした。それからの掻き方はウルシを育てて元気の良い漆を採るという考えでやっています。谷口さんが何も隠さず全部自分に教えてくれ



茨城県富永氏

たように、少しでも何か参考になる事があれば協力します。答の無い仕事だと思うので全部正解とは言いませんが、疑問な事があれば隠すものは全く無いのでお答えします。

5年程前から香木呂の会見本林で田端先生の試験掻きのお手伝いをさせていただいています。1年だけ平井君にやってもらいましたが、毎回20本から30本掻かせてもらい今に至っています。紆余曲折ありましたが先生の研究の役に立っていました。幸いです。

現在茨城の常陸大宮、奥久慈地域にウルシの木が無い、これは本当の事です。一生懸命植えている

のは分かりますが、これが現在不安に思っている事です。

本間理事長：

ちよつと補足しておきますとうちでは長男が漆の精製、クロメ等を担当していますが、わが家で使っている中では富永君の漆は非常に使い易いと長男の意見です。

さらに富永君が気にしている事は最近の天候です。ここ2年ぐらい皆さん感じていらつしやると思いますが、高温の日が続いて非常に苦慮しているということです。

それから植栽の団体と人手、漆掻きの視点での意見も組み込んで植えて欲しいと言うのが彼の意見でありました。

奥久慈地方は皆様ご承知のように他の産地、例えば岩手県に比べると漆の成長が非常に良いです。岩手では大体13年から15年ぐらいかかるものが大体9年から10年ぐらい、11年も経てば充分大きな木になります。

茨城県常陸大宮市 本間健司氏：

ネガティブな発言になりますが、今本当に茨城の奥久慈地域はウルシの木が無い、統計上はおそらく1万本、2万本あるのかもしれませんが、実際漆掻きとして掻ける木は本当に少ないのです。

実は本職でやっている仲間の50代の漆掻きさん、今日は欠席ですが、今年掻く木がまだ1本も確保

出来ていません。相談されて「じゃあうちの知って

いるところ、遠いから掻かないからあげるよ」と見に行きました。先ほど小村さんからお話が出ていましたが、掻く木には大体ピンクの色の目立つテープが巻いてあります。行って見たら5年から10年前にうちの工房で掻いたところも全部テープが巻いてありました。たまたま10年くらい前に契約書を交わしていたところがあつて、ぎりぎりそこは確保できましたが10本ぐらいです。10本のために車で1時間以上かけてわざわざ行けない、本当にそれぐらい木が無いのです。

セミプロの方が増えたのが1つの原因です。それ自体は悪くはない、うちだつて漆屋さんに納めているわけではない、まあセミプロといえばセミプロになります。浄法寺にも何十本か掻いて組合に出す人がいると思います。それは大きな産地だと良いかもしれないですが、茨城でそういう人がかなり増えてしまったのです。ここ何年かはもう150本採るのに地権者が20人くらい、10ヶ所ぐらいを10本だ、20本だとかちょこ行つて掻いていたのですがそれすら無くなってしまいました。こんな細いのはプロだつたら掻かないと安心していたところまでとられてる現状です。おそらく2、3年で今まで誰かが植えた木はほぼ無くなってしまふと思います。10年前に岩手の研修から帰つて来た頃は100本ぐらいは確保できましたが今はほとんどありません。10年で本当にいろいろ状況が変わつて来ました。

も自分は漆を続ける、掻く、植えるは続けようと思つています。

本間理事長：

本当に今切実な問題がいろいろありますが、なんとかみんなで相互に協力して、我々NPOは常に少し先を見て何かお役に立てるようなことを準備していくお手伝いが出来ればと思つてやっています。

神奈川県小田原市 原田陽輔氏：

「ウルシの木から広がる未来」と言う団体を2010年11月に立ち上げてなんとか今まで続いております。

10年以上放置されていたみかん畑を地主さんから本気でやるならただで貸してやると言われて使わせてもらつております。広さは約1000坪です。スタートは2010年11月、今年で9年目です。目標の10年目がようやく見えて来たところです。

ウルシの木は30本、非常に少ない本数でやっています。ですから何とか今まで続いて来たかなと思つております。会のモットーは無理なく、楽しく、末永く、とにかく継続することに集中して活動をしております。

神長さんからいただいた苗を植えています。「育ちが良くて漆の出が良いよ」という非常に楽しみな苗を分けていただきました。

10人で始めましたが、やはり不慣れでもう何と



茨城県本間健司氏

本来漆掻きは自分で掻くウルシの木を確保しなければならぬのですが、自分で植えられなかったのは理由があります。5本10本をずっと回つて行くと、通常岩手の方が1シーズンに200から400本掻けるところが茨城では移動時間などで1週間フルにやつて200本しかできません。岩手で200本だつたら、おそらく半分は違う仕事が出来ると思います。草刈りなどの管理が出来るエリアですが、茨城の県北だと中々難しい、200本を掻くのに400本分のフルの時間が掛かつて休みが無くなつてしまいます。結局植えて管理する時間が無いというのも一因です。

現在の状況ですが大分ウルシの木も大きくなつて高さは電信柱の電線ぐらいまでになっています。一度「漆を科学する会」の方にも見てもらいました。非常に成長が良いとの事で、漆の生育状況は順調です。

わたし達の活動はとにかく外からのお金を入れていない、会員から集める年会費は1000円です。メンバーは大体5人から10人の間ですから年間1万円くらいしかないのでなるべくお金をかけないようにやっています。道具なども、小田原の地元で間伐活動やいろんな地域関係の活動をしているチームがたくさんあるので借りて来ます。鎌は「森の仲間」という間伐活動チームからもう7年ぐらいも借りっぱなしになっています。

先ほど本間さんから人手が足りないとの話がありました。やはりわたしも仕事を抱えている中で草刈りをするのが重労働です。最初は特に草の伸びも早くて非常に負担が大きかったです。

労働力をどうするか、続けるために大事なのは人手の確保です。重要視しているのは参加者同士の会話です。集まつて来る仲間を楽しむを提供する作戦で人を集めるようにしております。草刈りは本当に重労働ですから、始めた時も「そんなこ

奥久慈はNPO2団体で木を何千本か持っているから、今やれているプロの方はある意味でラッキーです。これから新しく漆掻きに参入したい人は本当に難しいです。これを言うのはちよつと残念ですが、ぼくの個人的意見としては難しい、もう本当に木が無い、木が無ければ何も出来ないです。さらに茨城でこれから植栽が難しいのは高齢化、ぼくが住んで居るところは平均年齢がおそらく60歳半ばです。今植えても10年間管理できるかどうか分からない状態です。「苗木がいつばい出来ました」「植えましょう」「では誰が植えて誰が管理するんですか」というのは本当に深刻です。

昔はなんとなくお金があれば増えて行くような気がしていましたが、最近はそのよりもマンパワー、物理的なマンパワーが足りない気がします。お金があつても管理をうまくやつてくれる人を見つけ出せません。

少プラスになる話で、「分根の本」は今日初めて見ましたがすごく良いのになっていますね。うちで打合せしているのはたまに見ていましたが仕事をしているので全然聞いていませんでした。今は情報がすぐに伝達できるじゃないですか、例えばカンナを作っている人がここに居て、それをどういうふうになげるか、それを活かさないという意味がないわけですが、それを活かして木を育てる、マイナスな事を言っていますが、多分ぼくは死ぬまでこの漆関係の仕事をしていると思うのでどうにかしたいのです。最低で



長野県竹内氏

の中で一ヶ所に10本程度木がまとまって育っていて、漆掻きが掻ける様な状況は少なく1割程度です。育った3寸木以上の木の他に若い木の萌芽が群生している地点が数多くあります。ただそれが掻ける程に育つのは一部だけになってしまいが、毎年新たな場所も含めて生えて来ています。

県内の主な植栽は木曽漆器工業協同組合の契約植栽地、日本文化財漆協会の委託植栽地、それから各個人所有の植栽地があります。木曽漆器が10ヶ所1hで約800本、文化財が4ヶ所1・5hで約800本、個人は15軒ほどで400本から500本あります。



神奈川県原田氏

今後の漆掻きの十分な仕事量の確保ができるサイクルを作る目的を持って植栽や管理に携わっています。植栽地には遊休地を利用しています。地元住民の話を参考にシカが出ないスポットを選んでいますがかなり限定されてしまっています。

わたしは漆掻きを週3、4日やって残りの2、3日は木曽の漆器組合の漆精製工場で作業しているおかげで生活できています。

三重県熊野市瀬古正幸氏：

三重県熊野で農業に従事しています。漆掻きシーズンだけ岩手県の浄法寺で出稼ぎで漆を掻いている職人です。

岩手で2年ほど家具の勉強をしていた時に二戸、まだ合併前の浄法寺町で研修生を探していると学校の先輩から話がありました。授業で漆を使うことがあって興味があり、卒業してから大森俊三さんの元で研修を受けてずっとやり続けて現在に至っています。

松本さんは僕の2級上の先輩です。僕らの時代、僕は8、9歳の時に研修を受けましたが20代だと若手です。漆掻きの集まりに行くと皆さん80歳とか90歳の人ばかりでした。それが僕の漆掻きのイメージです。

研修の内容は今も昔も多分変わらないと思います。僕らの時代はどちらかというと漆に関心があったり、漆塗りをやっていたり、職人になりたいというよりも作家として入って来ている人が大多数でした。漆掻き、本職になるつもりは多分ないとは思いますが、形式上みんあると言って入って研修を受けて、それぞれ自分の活動をする方が多かったです。現在は漆が



三重県瀬古氏

売れている状況があるからかもしれないませんが、皆さん進んで職人になりたいと入って来ています。

今後やりたいことは植栽です。継続して漆掻きをやって年数的には長いですが、独立して漆掻き職人としてやり出して4年目でまだ新人です。独り立ちして間がありません。だから毎日、毎年試行錯誤しながら漆を掻いているわけですが、先程から話があるように掻く資源がありません。浄法寺の中でも先ほどの茨城の話と一緒に、木を取り合っている状況がますます加速しています。となるとよそから来ている者よりも地元の人の方が探しやすくなる、ぼくなどは段々探せなくなるという事です。

とやって、お金でも払わないと誰も来ないよ」と言われましたが、イベント、山の上で鍋や焼き肉をやれば人が集まります。わたくしのやり方はひとつの方法かと思えます。いとは思いますが、だったらまず人が来たい場所、楽しい場所を作る作戦で今のところ続いております。

ウルシを育てる体験をもらうことで今まで漆に接することのなかった人達にも漆を知ってもらうきっかけになるのではと思っています。この取り組みが小さいながらもひとつの事例だと知ってもらえる必要はないかと考えて、今後も活動を続けて行きたいと思っております。

長野県駒ヶ根市竹内義浩氏：

長野県の漆掻きと木と植栽の現状の課題についてお話しします。簡単です。まず漆掻きの現状、県内で漆掻きさんは他には居ません。漆器製作などの自家用に少量採る方は4、5人います。

現在長野県でやっている漆掻きの状況、採取木は大体毎年200本前後掻いております。これは場所によると10ヶ所から15ヶ所で、自宅から150kmぐらいの範囲内で週に3、4日程度山に入ります。採取量は辺掻き、裏掻き一部留め掻きまで行って、50kgから80kg程度です。現状、漆掻きが毎年状態の良い木の本数をそろえることは難しいです。県内では採取に適した程に育った植栽木はほとんどありません。自生状態で育った木は広範囲に点在しています。自生木の数は3寸以上の木で8千本から1万本程度と思われれます。しかしそ

三重県での植栽も以前から頭にはあるのですが、どうしても夏場に浄法寺に来ることになってうまく行っていない。10数年前に植栽をしたことはありますがすべて猛暑や獣害、シカの害にやられてしまつて、7、8年前からその活動もストップしたままです。ここ何年かはウルシを植えて増やす、そっちの方を本格的に投資して動かして行きたいなと一応気持ちとしては持っています。

獣害は現地パイロット事業に参加している人達はイノシシを防ぐためのネットを張り巡らしているのですがシカが入らなくなっています。シカ目的ではなかったのですが、おかげで山間部のみかん畑は守られています。その事業に参加していない方や山奥の方は自費でネットを張るなどはされているようです。

今後は10年、15年先の話になりますが自分で植えたウルシを掻きながら生計を立てられればいいなと思っています。

京都府福知山市 山内耕祐氏：

丹波漆ですが、最盛期には500人くらい漆掻きがいて漆掻きも盛んですが今は全く見る影も無く、一時は漆掻き職人も1人か2人の状態になりました。ウルシの木も自生している木もほとんど無くて放つて置いたら本当に無くなつてしまう状況でした。

2012年にNPO法人丹波漆を設立して丹波漆の漆掻き技術や生産を残して行く目的で現在

活動しております。今申し上げました様に社会的なニーズに答える、国産漆の生産をして行く、それを続けるために後継者を育成する、丹波漆の技術を繋いで行く、それらをやつて行くためにも漆文化の価値を発信して行くことを目的に設立しました。

漆掻きと漆植栽の現状ですが、現在13ヶ所の植栽地で約1000本の漆を管理して除草作業や先ほどから話が出ている獣害対策のフェンスの保守管理、病害虫防除などの作業を続けております。

漆掻きの仕事を残すためにわたし達が目標として掲げているのがウルシの木3000本を自分達



京都府山内氏

で育てて換える状態にすることです。先ほど400本、5000本無いと漆掻き専業で生きて行くことができないとお話がありましたが、丹波漆ではそこまで行くのは中々難しい現状もあり、この3000本は2、3人の漆掻きが技術を伝えながらなんとか漆掻きを続けて行く最低限のラインとして設けた目標です。これを7、8年で達成したいと新植を行っております。

漆苗の生産も自分達で行っていますが、品種は「丹波1号」夜久野原産で漆が良く出るものと、新潟の渡辺勘太郎さんが育てておられたものを丹波で増やしている「新文化」です。この2品種を分根法で増やし新植していきます。

10数年前から本格的に植栽を行っていますが、当初は耕作放棄地の水田跡地を中心に植栽をしていました。5、6年で成長が悪くなつて最終的には10数年経つてもほとんど換える状態になりませんでした。ですからすでに10数年経つて年数的には換えるはずなのに換えていないところがたくさんあります。

獣害の問題、丹波ではシカの害が非常にひどくて1・8mから2mのフェンスが無ければ基本的にもう植えることができません。漆に限らずあらゆる農作物が被害を受けるので夜久野町で農業をしている人は全部フェンスありきです。フェンスの耐用年数も大体14年くらいで、漆掻き一巡、一回換えるかもしれませんが2回目には足りません。漆掻きは本当に少なくとも年10数本程度しかでき

ておりません。ほとんど自生の木を探して換えている状態で、自分達で育てた植栽地が全面的に換える状態にはまだなっていない。漆掻きをしないと技術の継承もできないので師匠の岡本嘉明の元でわたしと2名が年に数本、わずかな量ですが漆掻きをしています。技術を繋ぐために漆掻きを続けている現状です。

何度も話に出ています。漆を掻くためにはウルシを植えて育てなければなりません。これは丹波漆でも非常に切実な課題となつていますので、それをクリアして行けるように一歩一歩着実にやっていけたらと考えております。

本間理事長：

京都はご存知の様にいろいろな文化財があるところ。そこでそういう状況なのです。だからもつともつとみんなが盛り上げて行かなければならないと思います。植栽場所を例えばシカの害のない位置へ移動する事も視野に入っていますか？

山内氏：

おそらく夜久野町にはシカの害がない場所はありません。

本間理事長：

京都全域で考えてシカの害のないところに植える選択肢はないのでしょうか？

山内氏：

わたし達の活動範囲から離れてしまっていますが、そうすることも現実的に考えなければならぬと思います。

香川県善通寺市 松本和明氏：

香川県善通寺市で「和うるし工房あい」と言う漆工房を営んでいます。

実家が漆屋で小学校3年から漆を触っていました。日本産の漆がすごく良いという事をとくとく聞かされて育ちました。

香川の漆芸研究所にいた時に徳島県の漆掻きを取材に行つたら、教えられていた「国産漆とはこうだよ」と言うものとはまったく違う漆が木から流れていました。何か違う、それですつと漆掻きを勉強したいなと思つていきましたが岩手で漆研修生の募集があつて浄法寺へ行きました。

今まで買って使つていた、自分が知っていた漆とは全く違う漆がありました。それまで勉強していた香川県の漆塗の技術はとりあえず置いて「この漆何？」というところから入りました。

漆の採り方で全然漆液のスペックが違うことを岩手のちよつと変わった漆掻きさんに教えてもらいました。「おれの漆はこうだ」というのをいろいろ見せてもらつて同じ実生の苗で育てた畑で採つても扱い方で相当変わつて来る事を教えてもらいました。

フォルムとテクスチャー、表情としている人々の漆器があります。日本産を塗りました、国産漆を塗りましたと言うだけではお客さんにはあまりメリットは無いのです。漆掻きさんによって出されたスペックを遜色なく出したい。器だけでは無いとは思いますが、いろんな表情として出したい、使つてくださるお客さんに国産漆はこうだ、こういうのもあるよと知ってもらいたいと思つています。



香川県松本氏

みかん山だった約3反の山を15分割して、毎年10本から20本ずつ植えて行くことにして2002年に公開植栽をしました。その時にたまたま県の三役の方がひとり来ておられて、県でもやりたいからと言う事で、徳島の東官平さんに来ていただいて植栽をしてもらいました。

2002年に公開植栽したものは一昨年から掻き始めました。伐採したら直径大体25cmくらいでした。細い木を掻くより径の大きい木を掻く、岩手で散々見せられていたので最初から15年以上、直径20cm以上と目標を立てていました。

工房で使っている漆は大体大森俊三さんの漆ですが少し変わった買い方をしまして、何辺目に掻いた朝方の漆とか夕方採った漆とかオーダーを入れていました。2010年度までに買い付けが大体終わって、約100kg、アルミのチューブに入れてワインセラーで熟成をかけています。

ウルシを自分で植えてやって行くのは結構大変で基本的にもう限界です。畑の管理はめちやくちやコストが掛かります。毎年10本から20本ずつ植えています。当然全部が活着するわけではないですし、たつた3反ですが山の草刈りは本当に大変です。ウルシを植えて、塗って、器を作って、売って、お金を換えてという生活は結構大変です。

徳島県三次市 松永猛氏：

徳島県三次市のシルバー人材センターに勤めながら漆の研修生として活動しています。

常に重要になります。シカと猿は常に移動していて住民より多い感じです。

香川漆器は昔からある文化です。でそちらとも連携したり、徳島県には今は途絶えてしまった半田漆器がありまして、今なら携わっていた80歳代ぐらいの方がおられますのでその方とも連携をとって、漆の全体を盛り上げていけたらと思っております。

本間理事長：

ここからは先ほどから重要な課題になっている漆植栽の問題になります。

多くの漆掻きさんが共通してこの問題を真剣にとらえていると思います。これが成就しない限りは全く先に進まない、絵に描いた餅になってしまいます。確かに小規模なところから啓蒙して行くことも重要ですが、大きな産地だった、例えば浄法寺、茨城、会津にしても元々経験値として最近まで残っていたところには頑張っていた方がいいなという思いです。

植栽が進まない限りは漆掻きを養成すること自体がまず不可能ですし、何人かの意見にあったように共倒れになってしまいます。専門でない方が掻くことでわずかしが残っていない資源を奪い合う事が今起きているわけです。そういう事を何とか克服するようにできないのでしょうか。

山城町の東官平さん、徳島県でも唯一の漆掻きが出来た技術を持った方になります。縁があつて弟子入りして技術を学んでいます。僕が36歳で東さんが82歳で50歳ほど開きがありますがその間は漆に関係する方が誰も居ない現状です。

徳島県で漆が生産されているのは三次市地方だけで他にはありません。

ここは記録によれば明治の頃からずっと生産がある産地でした。半世紀毎くらいにどんどん減って昭和23年に漆掻き職人の渡瀬秀雄さん、この方が東官平さんの師匠にあたる方ですが、262kgを採った記録を最後に段々減って、師匠の東さんが平成25年、最後に漆掻きをした時はわずか6kgでした。東官平さんは勤めながら漆掻きをしていましたので専業ではありません。

三次市行政と協力して市内にどのくらい自生している木があるのかを平成30年度に3ヶ月程かけて調べました。確認できたのは198本ですがおそらくもつとあるとは思いますが、その内掻けるものは43本程度です。木自体も非常に少ないし、1、2本あつてはまた1km離れたところと散在している状態で、漆掻きをする職人さんの労力が大変になると思います。

その様な現状の中、三次市の行政や県が中心になつている三次市山村活性化推進協議会という団体が活動しています。事業が6つ、漆やミツマタ、山野草や炭、木製の玩具、広葉樹、これらは古くから三次市や徳島県の山間部で生産してきたも

文化財建造物の問題、重要文化財と国宝の修復は全部日本産漆でやるように通達が出ているわけですが、ラップを吹かれて4年程の時間が経過しているにも関わらずその成果が大きくは上がりません。文化財建造物の需要が大きいわけです。国と自治体が植栽の柱になつて行かないとなりません。茨城では支援団体であるNPOの我々や麗潤館さん、また漆芸家が植えています。わたしの所でも3反、220本位の本数を自家用で持っています。こういう形では将来が望めないのは明らかですので、その辺はラップを吹いた側が、吹くための下準備をきちんと考えてもらいたかつたというのがあります。ただラップが吹かれなかつたらこのような場を持つこともなかつたと思うので二面では非常にプラスになっていますが、一面ではちよつと頼りない、もう少し下準備をきちんとした上でラップを吹かないといけなかつたのかなと個人的には思っています。

石川県輪島市役所 細川英史氏：

7、8年くらい前の秋だったと思いますが、神長さんに来ていただいて分根の勉強会をやりました。輪島でも熱心な方々が集まって指導してもらいました。

金沢方面から輪島に入る途中の県道の脇に小さい見本林の様なところがあります。勉強会の少し後に、吉木呂の会さんから苗を100本寄付して

ので、今一度見直してみようということが始まりました。

漆については、協議会に協力をいただいてシルバー人材センターのわたくし、理事の東さんや原田という職員と一緒に植栽の活動から始めております。今年度も100本植えます。植栽を通じて活動の普及をすることになっております。

今後の課題として、どこの地域とも同じなのですが特に獣害、シカに食べられますので対策が非



徳島県松永氏

いただき植栽にも来ていただきました。100本寄付していただいたまでは良かったのですが、「さあどこに植えよう、困った、困った」となつて何とかその場所を開けて植えました。50本ほど植えて、残り50本はそれぞれ参加した方の山に植えて、そちらは元気に成長しています。ここは残念ながら場所が適地ではなかつたものですから生きていることは生きているのですが残念な状態です。

数年前に輪島市の土地で建設残土の処理で谷をひとつ埋めたところに植えたことがありました。担当している課は埋めた跡地に何か植林をしなければいけない、国が言ったかどうかは分かりませんが、残土を処理した後に木を植えるまでがひとつセットになつた事業で、「せっかく植えるならウルシを植えたらどうや」となつて苗木を確保してくれと頼まれました。700本ほど確保して植えましたが大失敗しまして今生きているのが多分140本ぐらいです。確か次の年ぐらいに田端さんに見に来ていただきましたが、「こんなところに植えて、話にならない、全然駄目だ」といわれました。その時は結構何とかなるんじゃないかみたいな雰囲気もあつて、まあせっかく植えてくれると言うし、中々断りきれなかつた、駄目だと言えなかつたところもあつて多くの貴重な苗木を無駄にしてしまったという話です。

輪島へ行つたことがある方は海沿いの棚田、千枚田をご存知だと思いますが、そこへ行く途中の



輪島市細川氏

験場関係の試験など、いろいろな事にも協力して下さってずっとやり続けておられたのですが、昨年、亡くなられました。歳は92か3ぐらいでしたが90代になるまでずっと元気で仕事をされていました。

輪島で熱心な方々がグループで土地を借りて植栽活動を始めています。家の近所の山でやりたいと2、3年前から自分達で立ち木を整理し土壌改良をやって植え始めております。大体200本位植えたそうです。熱心に世話をしているので今のところ順調に育っています。

生平さんの話に戻りますが、この方は輪島の漆器商工業共同組合にアルバイトで雇われています。漆器組合さんの活動にうちが補助金を出して支援している形です。漆を採ったり苗木の育成や草刈りなどの仕事は一年を通してできるわけではないのでアルバイト程度で何とかつないでいる状況です。

文化財の修復に国産漆が使われるようになってから、我々産地で使う漆が手に入りにくくなっています。ここ2、3年来特に手に入りにくくなっているので地元でもやはりウルシを植えようとの機運が高まっています。今まで漆器組合さんはウルシの植栽にはあまり協力的ではなかったのですが、最近ようやく重い腰を少し上げるようになってきました。

本間理事長：

わたしから質問です。細川さんとは長いお付き合いですが、普通行政の方は大概3年くらいすると違う顔になってしまいます。でも細川さんはずっと担当しておられます。そこら辺はやはり輪島市が漆器に力を入れているからという事が大前提にあつて担当を変わらずにいらつしやるのでしょうか？

細川氏：

わたしが輪島市役所に勤めたのは平成9年です。最初平成9年から平成19年まで輪島漆芸美術館で学芸の仕事をやっていました。10年たつて「お前、一回漆器振興の方をやってみろ」と漆器振興の方に平成19年、2007年に来て以来ずっと担当しています。どちらかというと市役所の中では専門との扱いになっております。わたしの前任は二人いましたが、二人共市役所を辞めてしまったので、ほとんどわたしがやることになりました。うちの嫁、かみさんも輪島市役所で漆の関係の仕事をしているのですが、まあ二人でやっているようなことになっています。

本間理事長：

輪島のいろいろな失敗も細川さんが次に伝えていく、田端先生に聞いて土が合わなかったと分かる事がまず大事だと思います。この中からこれから植えようとしている方もおられると思

国道の脇にも少しウルシがあります。そこでは萌芽更新の試験をされていて切った後、横からいつばい萌芽しています。

20年くらい前にうちと漆器組合さんが共同でウルシの植栽事業を色々やった時、苗の無料配布をしました。植えて下さる方に無料で苗を差し上げましたが、それが成長して漆が採れる状態になっているそうです。

輪島で現在漆を採っている方は2人いまして、ひとりは一平さんという方ですが、平成25年、2013年、55歳から漆掻きを始められました。以前は地元の造り酒屋さんで酒造りや配達などをしておられました。そこを辞めることになって転職する、何をしよう、漆をやってみたいと思ったと言うのです。たまたまその時に国の事業で緊急雇用というのをやっていて、それに合わせて漆掻きの育成をやろうと募集を掛けたところ、ぜひやってみたいと参加されました。この方は2、3年くらい前、二戸市の日本漆掻き技術保存会の養成事業の長期研修にも参加しています。

もう一人は古池さん、お父さんが漆を採っておられて今55歳の方です。この方も漆器を作る職人さんで漆器屋さんに勤めていましたが、若い時に辞めることになって、しばらく漆の世界から離れてサラリーマンをしていました。55歳になって自分も親と同じようなことをやりたいと始められました。昨年の10月、浄法寺の漆掻き懇談会にわたしと一緒に参加しております。

古池さんのお父さんが唯一輪島でずっと昔から漆掻きを止めないで採り続けて来られました。石川県の林業試

ますが、そこら辺もうまく行政の方も使つて、うまく使つてと言うと失礼ですが、輪島の細川さんは非常に良い例として、地元へ働きかけることも一つの案ではないかと思

田端先生：

担当の人が永遠にそこにいるわけではないので、いなくなつた時にどうつないで行くか、そこを考えなくてはいいと思います。たまたま細川さんがおられるから助かっているだけであつて、他はローテーションになっているので今後どういう形で行けるか、行政の側の育てる問題がありますが、そこは考えて訴えて行かないといけないのだらうとは思っています。

本間理事長：

第一日目の懇談会の終了時間が来ました。4時間、長い時間本当にご苦勞様でございました。引き続き18時から懇親会を予定しています。



懇親会

2019年9月7、8日に第19回クロメ会が行われました。

今年は二日間合わせて延べ120人の参加があり、国内からは関東近県ほか福島、新潟、静岡、広島各県から、また韓国、台湾、中国からの参加者もありました。

1日目は天候に恵まれ真夏のような日差しの中、クロメ作業と並行して漆染め、見本林・苗畑の見学、漆掻き体験をしました。ホテル船亭での懇親会では漆掻きさんからの貴重なお話を聞き、初参加の方の自己紹介に美味しいお酒とお料理をいただきました。

2日目は午前中「漆掻き手法と周辺の問題」と題して本間幸夫理事長からお話があり、続いて奥久慈漆組合長神長政則氏は「分根法による優良ウルシ苗の生産と一度掻き終えた木の再利用について」新潟の漆掻き遠山友蔵氏は今年から試験的に始められた養生掻きについて、中国からの留学生劉幸運氏からは「中国の漆掻き方法とウルシ木の状況」をお話いただきました。

午後は日本工芸会正会員鳥毛清先生ご指導のもと沈金講習を行いました。台風15号が迫り予定より作業時間が短くなりましたが、参加された皆さんは限られた時間の中で黒塗りの丸皿に沈金刀で思い思いの図案を彫り、鳥毛先生に彫り面に金粉を入れてもらおうと華やかに図案が浮かびました。台風の影響で早めの解散となりました。



本間理事長と奥久慈漆組合長神長氏 挨拶



クロメ作業



ホテル船亭での懇親会の模様



「漆掻き手法と周辺の問題」講演会



鳥毛清先生ご指導による沈金体験



集合写真

うるし 言の葉 4

賛助会員 吉川 由季子

【漆掻き作業（茨城県奥久慈地方）】

④ 初辺漆（はつへんうるし）

目立て後、葉が大きくなり充実し始めた頃（花の開花準備ができた頃）に掻き始める。3〜7辺までの漆で、6月中旬〜7月下旬に採れる。浄法寺では2辺目は上山といわれ、2辺目から漆を採る。

⑤ 盛辺漆（さかりへんうるし）

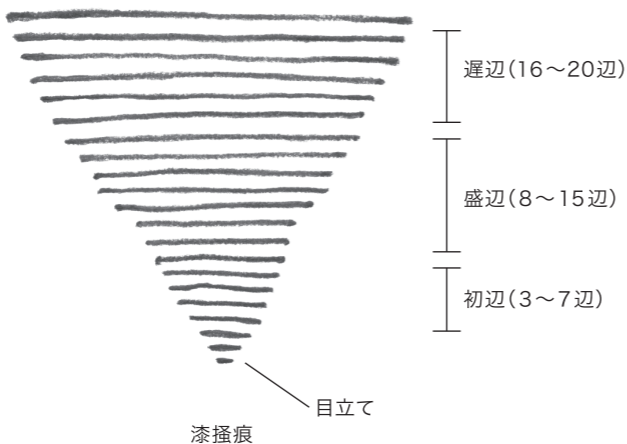
8辺〜15辺くらいの漆で、8月〜9月中旬に採れる。浄法寺では、8辺〜17辺くらいの漆で、9月上旬までの漆。

⑥ 遅辺漆（おそへんうるし）

16辺〜20辺くらいの漆で、9月中旬〜10月上旬に採れる。浄法寺では末辺漆といひ、9月上旬〜10月上旬の漆。盛辺漆に比べると、白っぽく粘りが強くなる。

⑦ 裏目漆（うらめうるし）

辺掻きが終わったあと、10日後（浄法寺では7日後）くらいの10月上旬〜10月下旬まで



の漆。目立ての下側と辺掻きの上側に傷をつけ採取したり、また幹の上部や太い枝にも約20cm間隔で傷をつけ採取する。遅辺漆より白っぽく粘度が高い。辺漆より品質はやや劣ると言われている。

「あさみぞれ・メダレ」裏目漆を採取した辺より翌朝染み出ている漆で、使い方によっては接着性能が非常に高い。裏目漆の採取時期にもよるが、水分が多く、裏目漆よりも粘度が高い白っぽい漆。

⑧ 止（留）漆（とめうるし）

裏目漆を採り終わってから、10日以上あけたあとの11月上旬から中旬にかけて、裏目と裏目の間に幹を一周する傷をつけ採取する漆。

⑨ 枝漆（えだうるし）

瀬（瀬占）漆ともいう。伐採後、枝を一定の長さになり切らねて水に浸し、時期をみて作業場で採取する漆。

漆の販売業者等では、中国産の生漆を瀬漆として売っていることもあるが、本来の瀬漆とは関係ない。

⑩ 根漆（ねうるし）

伐採後の切り株から採取した漆。

※奥久慈地方では上記の4〜6の辺掻き（初辺、盛辺、遅辺）まで採る職人が多く、裏目漆は注文があれば採取する程度。それ以外の止漆・枝漆・根漆は採算が合わず採取しない。（浄法寺では、⑧止漆は掻くが、⑨枝漆、⑩根漆は掻かない）

浄法寺漆について岩手県浄法漆生産組合前組合長・工藤竹夫氏、奥久慈漆・漆の精製等については奥久慈漆生産組合組合長・神長正則氏に教えて戴きました。



辺よりしみ出る漆液



あさみぞれ漆
(新潟県村上市朝日村の故・渡辺勘太郎氏採取)



会 報
第 19 号 / 2019年11月発行
- 漆掻き懇談会(漆掻きサミット)特集 -

NPO法人 壺木呂の会事務局
〒167-0052 東京都杉並区南荻窪 2-27-3
Tel:03-3334-0628 Fax:03-5930-4147
<https://1kiro.jp/> ✉ nihonsan@1kiro.jp
f <https://www.facebook.com/1kiro.jp/>